

教区だより

2021
7・8 月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第377号

再開にあたって

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなつた現実には直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられると思います。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願ひながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出遇い直していくことが大切ではないかと思ひます。

このような願いを引き受け『教区だより』の発行を再開してまいります。



ご恩をいただきながら ご恩をかえせない 私

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

目次

1 頁 「ことば」

2 頁 **連載** 悲しみが通じあう時 ―愚禿悲歎述懐を通して―

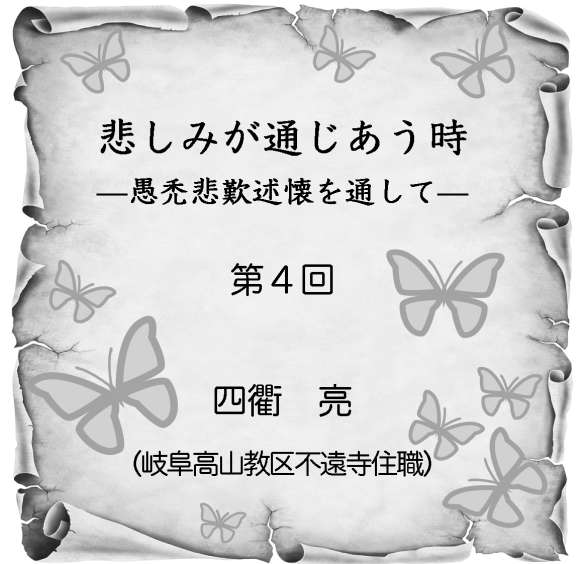
《第4回》 よつつじ 四衢 あきら 亮 氏

3 頁 「今、この時に、親鸞聖人に遇う」 いけざき 池崎 まさこ 方子 氏

4 頁 教務所からのお知らせ

イマダカラ[®]

教化推進本部 さかど 沙加戸 たかし 崇



悪性あくせうさらにやめがたし

ここは蛇蝎じやくのごとくなり

修善しゆぜんも雑毒ざつどくなるゆえに

虚仮こけの行ぎやうとぞなづけたる (聖典五〇八頁)

自らすすんで悪を為してしまう悪性は止めがたく、その悪心が、蛇蝎にたとえられています。蛇蝎は人の忌み嫌い恐れるものという意味で使われています。他人の悪性は、まさに蛇蝎のように恐れ嫌うのに、自分の悪性には気づけないのが私たちなのかもしれません。

その悪性について、『仏説無量寿経』は五悪段の第二悪で、「おのおの貪欲・瞋恚・愚痴・癡を懷いだきて自みづか

ら己おのれを厚あつくせんと欲おもえり」(聖典六八頁)と説いています。厚いという字は、ねんごろ・親切という意味で使われていますから、自分で自分にねんごろに親切にする、つまり自分を先ず優先し手厚くするということです。どうしてもそうしてしまうのが、私たちに欠けることなく備わった煩惱です。それが悪性と示されているのです。

自分を先にして何が悪いのか、生きていくために必要なことだ、そうしなければ置いて行かれるではないかとも思われます。私たちはあらゆることを競い合いに生きています。足の速さ・楽器の上手さ・学校のテストの点数・学歴・仕事の成果・貯金の額・若さと健康・終活の手際ていさいのよさなど。露骨に自慢する他人を見れば、嫌悪感を持ちます。しかし、後れを取るばかりではないやですから、やはり密かに自分を先にしてしまいます。

十年前の東日本大震災、その後で関東での法座に伺った折に聞いた、一人の女性の感話かんわが、今も忘れられません。地震が収まった後、コンビニに出かけると、食料と飲み物を求め、みんな持てるだけの品物を抱えてレジに並んでいたのです。その中に小学校に入る年ごろの男の子が、おやつを買ったためにお菓子を一つ持って並んでいたのだそうです。そしてその子の番になった時、その子は、

レジの横に置かれた震災への支援の募金箱を見ると、少し考える様子を見せ、その後にはぎりしめたおこずかいを募金箱に入れ、持っていたお菓子を棚に返してコンビニを出て行ったそうです。

その時、レジに血走った眼をして並んでいたおとなの誰もが、ハッと顔をしたのです。その女性は、急に恥はづかしくなったと語られました。

私たちは、我さきになって、被災者や感染者を置き去りにしてしまうものを持っています。さらにコロナの場合は、感染の恐怖で攻撃さえてしまいます。しかし、その姿の愚かさぐかさに気づいて、それを恥じるものも持っているのです。自分でその自分に気づくことはできませんが、あの男の子の行為のように、気づかせてくれるものが、私たちの周りにはたくさんあります。

気づかされた心は、自分の善意やまじめさも毒を持つていることを深く知らされる心でもあるのです。私たちは自分の善意やまじめさを頼みとしますから、他人が同じようにまじめでないと、どうしても腹を立て、毒を含んでその人を許せなくなり。それが私たちのごまかしごまかしのような虚仮こけのすがたです。

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」



「聞けない私」

金沢教区第4下組正林寺 池崎方子

ここ二年ほど「ああ今まさに地獄にいるのだ」という感情が日常に影を落としています。「『たら』」「『れば』」を思い巡らし、ついには「浄土真宗の教えを知らなければ、こんなに苦しまなかったかもしれない」とまで考えるようになりました。それでも、近所のおばあさんへの月忌参りの日は、沈んだ気持ちを晴らしたいと玄関を出ます。私を「マサコさん」と呼び、毎度「ようこそようこそ」と迎えてくれるおばあさん。お勤めの後は、おばあさんの子どもの頃の思い出、仕事や子育て、そして病気の苦勞、聞法に勤しんでいた祖母や母

の姿、家族とこの先の不安など、話が尽きません。ただでさえ少なくなった人との関わりが、コロナウィルスの影響でさらに減っているのです、尚更です。

いつもの私なら、相手がこれだけ語ってくれるのなら自分も、と心を開いて愚痴をこぼしたくなるものです。しかし、自分が多くは語らずとも、大事な時間を過ごせたという嬉しさを感じます。この嬉しさはどこからくるのか考えるとき、浄土真宗では「座談」という場と時間が大切にされてきたことを思います。

「座談」の意義は相手の話にじっくりと耳を傾けること、自分の思いを語ることで自分に向き合うことだと教わってきました。しかし、私が座談に参加するときは「自分をさらけ出し解放したい」という目的のほうが大きいのです。それが月忌参りでは、苦悩を抱えつつも念仏申しながら今を生きている目の前の存在として出会い直し、その言葉聞いたことに喜びをおぼえたのでした。聞くことを通して、仏が苦悩する人間に絶えずはたらいっていることを知らされているのです。

親鸞聖人は行く先々でたくさんの人に会い、一人ひとりの声を聞いて、自分とも向き合っておられたのでしょうか。「聞く人親鸞」と表現された先輩もおられます。親鸞聖人にとって人々の声を聞く

ことは、同時に仏の願いに遇うことだったのです。仏は苦悩する人々を悲しみ、我が名を称えよと呼びかけられている、そのことを人々と関わりながら生涯をかけて確かめられたのだと思います。

このように、仏法を聞くということは、苦悩する人間や自分を知らされていくことだ、と何度も教えられました。しかし、人の話を聞くことも、仏法を聞くことも本当に難しいことです。人の話も仏法も「私の都合に合うことだけしか聞いていない」からこそ、地獄を生み出し、その苦しみの原因を「浄土真宗の教えを聞いたからだ」と言い放つのです。

苦しさから逃げたい一心で、自分にも仏法にも背を向けている私です。自分がわからなくなった挙句に、息子をつかまえ「お母ちゃんのお仕事ってなんだと思う」と尋ねました。すると「親鸞聖人のお話を聞く人」と答えました。苦悩する人々、そして自身に向き合うことが仏の教えに遇うことだ、と歩まれた親鸞聖人。その姿に聞きたずねてこられた先達の後には続く生き方を選ぶのか、息子の言葉が耳から離れず、日々問われ続けています。

教務所からのお知らせ

《住職任命》

二〇二一年五月二十八日付

山城第三組 専念寺

仲野恵理子

〔敬称略〕

《敬弔》

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第二十八組 徳乗寺前住職

比叡合正

二〇二一年三月十三日

八十七歳

丹波第三組 行雲寺前住職

岡村正顯

二〇二一年四月三十日

八十九歳

因伯組 光徳寺住職

小早川昭謙

二〇二一年五月三十一日

七十七歳

〔敬称略〕

《教務所夏季休暇のお知らせ》

8月7日(土)～15日(日)を夏季休暇といたします。

緊急(期間中の授与物のお渡しや院号法名の申請、収骨の受付等を含みません)の場合は、緊急連絡先までご連絡いただきますようお願い致します。

〔緊急連絡先(教務所携帯電話)〕

090-3719-17982

イマダカラ

今年も蓮如上人御影道中が中止になった。

4月17日に真宗本廟を出発して7日間の御下向、吉崎別院での10日間の法要の後、5月2日から9日までの8日間の御上洛。移動の15日間はまさに寝食を共にし「密」になる。今のこの状況では、やはり実施は難しい。

私の自坊は、東海道に面しており、5月9日にお立ち寄りいただく。昨年と今年、2年続いての中止はある程度予想通りだった。以前、ご一行が宿泊されるお寺の住職が、「うちは年に2回報恩講を勤めているようなものです」と話しておられた。そこまで準備が忙しいというわけではないが、なければほっとするのも正直な感想だ。

2年に及ぶ中止で御影道中の存続や、お立ち寄り寺院の体制など少し心配になるが、様々なことを思いをめぐらせる中で、4年前に随行教導でお越しの先生がお話しされていたことを思い出した。

「御影道中にお参りにお見えになる方々は、掛け軸に会いにお見えになるのではないのです。蓮如上人に会いにお見えになるのです」と。上人が念仏申せと仰ったことに皆がここで応答している。それが御影道中なのだろう。500年前の蓮如上人がおられた頃と同じはたらきが今ここに、念仏申すことではたらき続けている。

聞いたときはなるほどなぁと人ごとのように聞いていた。しかし今、そのうなずいた人は御影がお見えにならないこの状況で、やれやれと座り込んでいて良いのか？あれ？御影道中って何だったのか。

来年、どんな状況になっているのか分からないけれど、やっぱり蓮如さんの四幅の御絵伝をお掛けして、お寺で集まりたいと思う。御影道中が来られても、来られなくても。そして今年の5月9日をばんやり過ごしていたことを、少し悔やんでいる。

(教化推進本部 沙加戸 崇)

編集後記 the editor's note

先日、教区同朋会議が2023年の宗祖慶讃法要にむけて教区内の機運を促進する意味も込められて開催されました。この会議は元々広域な教区において教区内の課題を共有する目的で開かれてきましたので、昨年度の中止を受け今年度はなお一層「何としても開催せねば」という気概が感じられたように思います。そんなこともあって70人の方が参加する最近では大きい会議となりました。

大半はZoomでの参加となりましたが、工夫次第でこの規模の集まりが開催できるということは大きいことではなかったかと個人的には思います。しかし、教区においては現段階でこの規模のZoom併用会議はまだ黎明期の域は出ておらず、一方通行となった感も否めないのはこれからの課題となったのではないかと思います。

一方高齢者のワクチン接種も一定程度進んできています。これが進めば元の日常が戻って来るのではとの淡い期待もあります。

(編集委員：蒲池 義圭)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第377号

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2021 (令和3) 年7月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

